

令和2年11月11日

環境省

競争の導入による公共サービスの改革に関する法律に基づく
「東日本大震災に係る海洋環境モニタリング調査業務」
に係る落札者の決定及び契約の締結について

競争の導入による公共サービスの改革に関する法律（平成18年法律第51号）に基づく民間競争入札を行った「東日本大震災に係る海洋環境モニタリング調査業務」（以下「本業務」という。）について、下記のとおり落札者を決定し、契約を締結しました。

記

1. 落札者及び契約相手方の住所、名称及び代表者の氏名

東京都新宿区西新宿 7-5-25
日本エヌ・ユー・エス株式会社
代表取締役社長 近本 一彦

2. 契約金額（落札金額）：84,084,000円（消費税込み）

3. 落札者の総合評価点：169.20点

総合評価点数（300点満点）＝技術点（200点満点）＋価格点（100点満点）

4. 落札者の決定の経緯及び理由

「東日本大震災に係る海洋環境モニタリング調査業務民間競争入札実施要項」に基づき、入札参加者（1者）から提出された提案書について、審査委員会により審査した結果、技術点は評価基準を満たしていた。令和2年10月22日に開札したところ、予定価格の範囲内の価格が提示され、価格点も含めて総合評価を行った結果、上記の者を落札者とした。

5. 落札者における本業務の実施体制及び実施方法の概要

平成23年3月11日に発生した東日本大震災に伴い、被災地においては、被災した工場等からの有害物質の公共用水域・地下水・土壌への漏出、津波による廃棄物の海上流出や油汚染及び福島第一原子力発電所からの放射性物質の漏出等により、国民の健康や生活環境への悪影響が懸念されている。これら環境汚染による人への健康被害の防止、被災地の生活環境に対する住民不安の解消のためには、継続的かつ的確に汚染状況を把握する必要がある。

このことから、海域においては、流出した有害物質及び廃棄物並びに福島第一原子力

発電所より漏出した放射性物質に起因して海洋環境で汚染が生じる可能性のあった項目のうち、今後も国民の健康や生活環境への悪影響が懸念される項目について、平成 28 年度までの調査に引き続き、経時的な変化の監視に資する調査を実施する。

落札者は、本業務を『東日本大震災に係る海洋環境モニタリング調査業務民間競争入札実施要項』に基づき実施する。

本業務の実施に当たっては、業務責任者 1 名、業務担当者 5 名程度を配置する。

6. 本業務の詳細な内容及びその実施に当たり確保されるべき質及び水準に関する事項

(1) 業務の詳細な内容

1) 調査計画案の立案

請負者は、事業の目的に鑑みて 2) の事項を満たす調査計画を立案する。調査計画には、目的、測点配置、調査時期、分析項目、試料採取方法、分析方法を含めることとし、4) に示す検討会に諮り、適宜変更を行い決定するものとする。

2) 調査の実施・分析・結果解析及び取りまとめ

(ア) モニタリング調査

岩手県釜石沖～福島県いわき沖までのうち 4 測線（各測線 3 測点：離岸 1 km、10km、20km）を配置し、堆積物試料を採取し、化学物質及び放射性物質を対象とした調査を実施する。

(イ) 要監視対象項目の調査

平成 23～28 年度調査の結果、依然として高い値が検出されている岩手県釜石沖～福島県いわき沖までの海域において 55～65 検体の堆積物試料を採取し、化学物質及び放射性物質を対象とした調査を実施する。

3) 公表用資料の作成

2) により得られた分析結果および解析を基に、公表用資料(案)を作成する。

4) 検討会の設置・開催

上記 1)～3) の業務への指導・助言を得るため、海洋環境分野の学識経験者 8 名程度からなる「東日本大震災に係る海洋環境モニタリング調査検討会」を請負者が運営する。なお、検討会は計 3 回程度開催する。

5) 環境省 HP への公表コンテンツの作成

平成 23 年度から令和元年度の東日本大震災に係る海洋モニタリング調査業務の調査結果を取りまとめ、トレンドなどを押さえわかりやすい形で環境省 HP に公開するためのコンテンツを作成する。

6) 業務結果報告書の作成

請負者は、調査結果及び検討会における議論を取りまとめ、業務結果報告書を作成する。

(2) 確保されるべき質及び水準

本業務の実施に当たり、サービスの質を確保するために、民間事業者が達成すべき目標(必要な水準)は以下の通りとする。ただし、事業者の責に帰すべき自由によらず目標を達成できない場合はこの限りではない。

①本事業全体の企画立案及び進行管理等

本業務の実施要項に記載されている内容を確実に実施すること。

②モニタリングの報告について

請負者は、環境省に対し、試料採取・採集数及び試料の分析数を採取時期及び分析終了日から2週間以内に環境省に提出し、事業の進捗状況について説明する。環境省は、請負者から提出された報告を確認することで、事業の進捗状況を把握する。

7. 本業務の実施期間

令和2年11月11日～令和2年3月31日

8. 契約相手方(落札者)が、民間競争入札対象公共サービスを実施するに当たり国対して報告すべき事項、秘密を適正に取り扱うために必要な措置その他の対象公共サービスの適正かつ確実な実施の確保のために契約により民間事業者が講ずべき措置

(1) 実績及び状況報告

本業務が適正に履行されていることを確認するため、民間事業者は、環境省に対し、試料採取・採集数及び試料の分析数を採取時期及び分析終了日から2週間以内に環境省に提出し、事業の進捗状況について報告するとともに、下記①及び②の報告を環境省に行うものとする。また、別途、環境省の必要に応じて報告等を求められた場合は、適宜対応するものとする。

- ① 請負者は本業務に関して、環境省に寄せられたクレームや問い合わせについて環境省から報告を求められたときは、請負者はこれに応じなければならない。
- ② 請負者は本業務に係る不意の事故等については、迅速に対応すると同時に速やかに環境省に報告しなければならない。
- ③ 本業務に係る検査は、支出負担行為担当官が自ら又は補助者に命じて、契約書及び仕様書その他の関係書類に基づいて行うものとする。

(2) 調査

環境省は、本業務の適正かつ確実な実施を確保するために必要があると認めるときは、法第26条第1項に基づき、請負者に対して、必要な報告を求め、又は事務所等に立ち入り、

本業務の実施の状況若しくはその帳票、書類その他の物件を検査し、若しくは関係者に質問することができる。

立入検査をする環境省の職員は、検査等を行う際には、当該検査が法第 26 条第 1 項に基づくものであることを請負者に明示するとともに、その身分を示す証明書を携行し、関係者に提示するものとする。

(3) 指示

環境省は、本業務を適正かつ的確に実施させるために必要があると認めるときは、請負者に対し、必要な措置をとるべきことを指示することができる。なお、上記によらず、業務の質の低下につながる問題点を確認した場合は、指示を行うことができるものとする。

(4) 契約に基づき請負者が講ずべき措置

① 業務の開始及び中止又は廃止

請負者は、やむを得ない事由により、本業務を中止又は廃止しようとするときは、あらかじめ、環境省の承認を受けなければならない。

② 法令の遵守

請負者は、本業務を実施するに当たり適用を受ける関係法令等を遵守しなくてはならない。

③ 再委託の取扱い

(ア) 請負者は、本業務の実施に当たり、その全部を一括して再委託してはならない。

(イ) 請負者は、本業務の実施に当たり、その一部について再委託を行う場合には、原則として、あらかじめ提案書において、再委託に関する事項（再委託先の住所・名称・再委託先に委託する業務の範囲、再委託を行うことの合理性及び必要性、再委託先の業務履行能力並びに報告徴収その他業務の方法）について記載しなければならない。

(ウ) 請負者は、本契約締結後（イ）の提案書に基づき、又はやむを得ない事情により再委託を行う場合には、再委託に関する事項を明らかにした上で環境省の承認を受けなければならない。

(エ) 上記（イ）及び（ウ）により、請負者が再委託先に業務を実施させる場合は、すべて請負者の責任において行うものとし、再委託先の事業者の責めに帰すべき事由については、請負者の責めに帰すべき事由とみなして、請負者が責任を負うものとする。また、再委託先については、請負者と同等の義務を負わせるものとする。

④ 談合等の不正行為に係る違約金等

(ア) 請負者は、次の各号の一に該当するときは、契約金額の 100 分の 10 に相当する額を違約金として環境省が指定する期日までに支払わなければならない。

- a 本契約に関し、請負者が私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律（昭和 22 年法律第 54 号。以下「独占禁止法」という。）第 3 条の規定に違反し、又は請負者が構成事業者である事業者団体が独占禁止法第 8 条第 1 号の規定に違反したことにより、公正取引委員会が請負者に対し、独占禁止法第 7 条の 2 第 1 項（独

独占禁止法第8条の3において準用する場合を含む。)の規定に基づく課徴金の納付命令(以下「納付命令」という。)を行い、当該納付命令が確定したとき(確定した当該納付命令が独占禁止法第51条第2項の規定により取り消された場合を含む。)

- b 納付命令又は独占禁止法第7条若しくは第8条の2の規定に基づく排除措置命令(これらの命令が受注者又は受注者が構成事業者である事業者団体(以下「請負者等」という。)に対して行われたときは、請負者等に対する命令で確定したものをいい、請負者等に対して行われていないときは、各名宛人に対する命令すべてが確定した場合における当該命令をいう。次号において「納付命令又は排除措置命令」という。)において、本契約に関し、独占禁止法第3条又は第8条第1号の規定に違反する行為の実行としての事業活動があったとされたとき。
- c 納付命令又は排除措置命令により、請負者等に独占禁止法第3条又は第8条第1号の規定に違反する行為があったとされた期間及び当該違反する行為の対象となった取引分野が示された場合において、本契約が、当該期間(これらの命令に係る事件について、公正取引委員会が請負者に対し納付命令を行い、これが確定したときは、当該納付命令における課徴金の計算の基礎である当該違反する行為の実行期間を除く。)に入札(見積書の提出を含む。)が行われたものであり、かつ、当該取引分野に該当するものであるとき。
- d 本契約に関し、請負者(請負者が法人の場合にあっては、その役員又は使用人)が刑法(明治40年法律第45号)第96条の3又は独占禁止法第89条第1項若しくは独占禁止法第95条第1項第1号の規定による刑が確定したとき。

(イ) 前項の規定は、環境省に生じた実際の損害の額が違約金の額を超過する場合において、環境省がその超過分の損害につき賠償を請求することを妨げない。

(ウ) 請負者は、本契約に関して、上記(ア)の各号の一に該当することとなった場合は、速やかに当該処分等に係る関係書類を環境省に提出しなければならない。

⑤ 債権債務の譲渡の禁止

請負者は、本業務の実施により生じる権利又は義務の全部若しくは一部を環境省の承諾を得た場合を除き第三者に譲渡し、又は継承させてはならない。ただし、信用保証協会及び中小企業信用保険法施行令(昭和25年政令第350号)第1条の3に規定する金融機関に対して売掛債権を譲渡する場合にあってこの限りではない。

⑥ 秘密の保持

請負者は、本業務の実施により知り得た事項の機密を保持しなければならない。ただし、環境省に書面による承諾を得た場合、若しくは当該機密が次の各号のいずれかに該当する場合はこの限りではない。

(ア) 知り得た際、既に公知となっている事項

(イ) 知り得た後、請負者の責に帰すべき事由によらず刊行物その他により公知となった事項

(ウ) 知り得た時点で、既に請負者が自ら所有していたことを書面で証明できる事項

⑦ 個人情報の取扱い

- (ア) 請負者は、環境省から預託を受けた個人情報について、善良な管理者の注意をもって取扱う義務を負わなければならない。
- (イ) 請負者は次の各号に掲げる行為をしてはならない。ただし、事前に環境省の承認を受けた場合は、この限りではない。
 - a 環境省から預託を受けた個人情報を第三者（再委託する場合における再委託先を含む。）に預託若しくは提供又はその内容を知らせること。
 - b 環境省から預託を受けた個人情報を本業務の目的の範囲を超えて使用、複製、又は改変すること。
- (ウ) 請負者は、環境省から預託を受けた個人情報の漏洩、滅失、毀損の防止その他の個人情報の適切な管理のために必要な措置を講じなければならない。
- (エ) 環境省は、必要があると認めるときは、職員又は環境省の指定する者に請負者の事務所及びその他の業務実施場所等において、環境省が預託した個人情報の管理が適切に行われているか等について調査をさせ、請負者に対して必要な指示をすることができる。
- (オ) 請負者は、環境省から預託を受けた個人情報を本業務の完了、廃止又は解除をした後に速やかに環境省に返還しなければならない。ただし、環境省が別に指示したときは、その指示によるものとする。
- (カ) 請負者は、環境省から預託を受けた個人情報について漏洩、滅失、毀損、その他違反等が発生したときは、環境省に速やかに報告し、その指示に従わなければならない。
- (キ) 上記（ア）及び（イ）の規定については、本業務の完了、廃止又は解除をした後であっても効力を有するものとする。

⑧ 属性要件に基づく契約解除

環境省は、請負者が次の各号の一に該当すると認められるときは、何らの催告を要せず、本契約を解除することができる。

- (ア) 請負者の責に帰する事由により、請負者がこの契約の全部又は一部を履行する見込みがないと認められるとき
- (イ) 法人等（個人、法人又は団体をいう。）の役員等（個人である場合はその者、法人である場合は役員又は支店若しくは営業所（常時契約を締結する事務所をいう。）の代表者、団体である場合は代表者、理事等、その他経営に実質的に関与している者をいう。）が、暴力団（暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律（平成3年法律第77号）第2条第2号に規定する暴力団をいう。以下同じ）又は暴力団員（同法第2条第6号に規定する暴力団員をいう。以下同じ。）であるとき
- (ウ) 役員等が、自己、自社若しくは第三者の不正の利益を図る目的、又は第三者に損害を加える目的をもって、暴力団又は暴力団員を利用するなどしているとき
- (エ) 役員等が、暴力団又は暴力団員に対して、資金等を供給し、又は便宜を供与するなど直接的あるいは積極的に暴力団の維持、運営に協力し、若しくは関与しているとき
- (オ) 役員等が、暴力団又は暴力団員であることを知りながらこれを不当に利用するなど

しているとき

(カ) 役員等が、暴力団又は暴力団員と社会的に非難されるべき関係を有しているとき

⑨ 行為要件に基づく契約解除

環境省は、請負者が自ら又は第三者を利用して次の各号の一に該当する行為をした場合は、何らの催告を要せず、本契約を解除することができる。

(ア) 暴力的な要求行為

(イ) 法的な責任を超えた不当な要求行為

(ウ) 取引に関して脅迫的な言動をし、又は暴力を用いる行為

(エ) 偽計又は威力を用いて業務を妨害する行為

(オ) その他前各号に準ずる行為

⑩ 再委任契約等に関する契約解除

(ア) 請負者は、契約後に再受任者等（再受任者及び共同事業実施協力者並びに請負者、共同事業実施協力者又は再受任者が当該契約に関して個別に契約する場合の当該契約の相手方をいう。以下同じ。）が⑧の（イ）から（オ）まで又は⑨の解除対象者であることが判明したときは、直ちに当該再受任者等との契約を解除し、又は下請負人等に対し契約を解除させるようにしなければならない。

(イ) 環境省は、請負者が、再受任者等が解除対象者であることを知りながら契約し、若しくは再受任者等の契約を承認したとき、又は正当な理由がないのに前項の規定に反して当該再受任者等との契約を解除せず、若しくは再受任者等に対し契約を解除させるための措置を講じないときは、催告することなく本契約を解除することができる。

⑪ 契約解除時の取扱い

(ア) 環境省は、上記⑧から⑩の規定により本契約を解除した場合は、これにより請負者に生じた損害について、何ら賠償ないし補償することは要しない。

(イ) 請負者は、環境省が上記⑧から⑩の規定により本契約を解除した場合においては、契約金額の 100 分の 10 に相当する額を違約金として環境省が指定する期間内に支払わなければならない。

(ウ) 前項の場合において、契約保証金の納付が行われているときは、環境省は、当該契約保証金をもって違約金に充当することができる。

⑫ 契約内容の変更

環境省及び請負者は、本業務を改善するため、又は経済情勢の変動、天災地変の発生、関係法令の制定若しくは改廃、その他契約の締結の際、予測できなかった著しい変更が生じたことにより本業務の実施が不相当と認められる場合は、協議の上、法第 21 条の手続を経て契約の内容を変更することができるものとする。

⑬ 業務の引継ぎ

(ア) 請負者は、契約期間前において環境省から確実に必要かつ十分な業務の引継ぎ等を行うこと。

(イ) 当該引継ぎに必要な経費は、請負者の負担とする。

(ウ) 環境省は、業務の引継ぎ等が円滑に実施されるよう必要な協力を行うものとする。

⑭ 契約の解釈

本契約に関して疑義が生じた事項については、その都度、請負者と環境省が協議するものとする。

9. 請負者が本業務を実施するに当たり第三者に損害を加えた場合において、その損害の賠償に関し契約により請負者が負うべき責任（国家賠償法の規定により国の行政機関等が当該損害の賠償の責めに任ずる場合における求償に応ずる責任を含む。）に関する事項

(1) 環境省が国家賠償法（昭和 22 年法律第 125 号）第 1 条第 1 項等に基づき当該第三者に対する賠償を行ったときは、環境省は請負者に対し、当該第三者に支払った損害賠償額（当該損害の発生について環境省の責めに帰すべき理由が存する場合は、環境省が自ら賠償の責めに任ずべき金額を超える部分に限る。）について求償することができる。

(2) 請負者が民法（明治 29 年法律第 89 号）第 709 条等に基づき当該第三者に対する賠償を行った場合であって、当該損害の発生について環境省の責めに帰すべき理由が存するときは、当該請負者は環境省に対し、当該第三者に支払った損害賠償額のうち自ら賠償の責めに任ずべき金額を超える部分について求償することができる。